

360°

フォトジャーナリスト
宇田 有三



鉄条網の向こう側はビルマ領(タイ側から撮影)。ひょいと跳び越えることのできる障壁だが…

風景一考

「だって、きつい仕事だろ。タイ人は誰もしないよ。それにビルマ人は賃金が安いし」
— 人為的に引かれた、目に見えぬ国境線は、人の運命を左右する。人は、どの時代に、どこで誕生するか、自分で決めることはできない—
どついう訳か、使い古された言い回しが頭に浮かぶ。

夜行バスは、町に入る二、三キロくらい手前で、静かに停車した。夜明けまで、まだ一時間ほどある。国境警備の係官がバスに乗り込んで来た。男性二人と女性一人が下ろされる。おそらく、バンコクに出稼ぎに行っていた不法就労のビルマ人であろう。

初めてその光景を見たとき、夢うつつでぼんやりしていた頭は、いっぺんにはつきりした。連れ去られる彼らの後ろ姿を目にして、心を痛めたものだ。だが、その後、何十回もそんな状況に出くわし、それも一つの風景になってしまった。

タイの首都バンコクから西北へ約二百四十キロ。日本にも走っていない豪華バスで八時間弱、ビルマ(ミャンマー)との国境、メソット(モット)の町に到着する。

河縁に腰を下ろす。のかな国境風景を前にして、取材には必ず持つて来る中村哲さんの『アフガニスタンの診療所から』(筑摩書房)を開く。

メソットは、人口約三、五万人ほどの町。ビルマに近しいこともあり、やはりビルマ人の姿を多く見かける。朝六時から夕方六時までは国境が開き、その時間ならビルマ人も合法的にメソットに滞在することができる。昼間人口のおよそ半数はビルマ人だ。

「旅人には心地よい風景も、そこに定着する人びとの生活の中に立ち入ると、たちまち豹変する」

もっとも、実際にタイとビルマを隔てているのは、メソットからさらに西へ約二、三キロ、モエ河という自然の国境線である。モエ河のほとりでは、越境してきたビルマ人たちが観光客目当てにタバコやビルマ特産の宝石などを売り歩いている。

「旅人には心地よい風景も、そこに定着する人びとの生活の中に立ち入ると、たちまち豹変する」

タイ人の現場監督に理由を聞いてみた。雨期になるとモエ河は氾濫し、そのたびに国境線が変るといふ事態がある。一九九八年くらいだったろうか、ちよっとした国境紛争にもなりかけた。国境線を確定するために突貫で護岸工事が行われた。夕

命として定められていたのだろうか。